

# 生涯学習機会における学習者の参加を支援する システムの構築についての方策

高 橋 一 夫

## 〔抄録〕

現在、生涯教育・生涯学習の意義や重要性が広く認識され、様々な取り組みが行われてきている。しかし、生涯学習の必要性を認識していることと、実際に生涯学習の実践者であることは必ずしも合致していない。そのことから、学習機会への参加に際し、それを阻害する要因が存在すると考えられる。

そこで本論文では、実際に学習機会に参加している学習者に対し質問紙調査を行い、その分析をとおして学習阻害要因を明らかにした。また、学習者の属性に注目し、学習機会への適応度についても分析をおこなった。その結果、学習者の属性によって、また同じ属性であっても、過去の学習経験などから違いがみられた。それらのことから学習者の捉え方が、学習機会における学習者の参加を支援する方策を導くために重要な視点になることが伺えた。

キーワード：学習機会、学習阻害要因、ダブルスクール

## 序章 問題の設定

現在の日本は大学進学率の点でアメリカと並び世界でも屈指の高学歴化社会であり、また当然高等学校への進学率も非常に高い。1997年の中学校卒業者のうち高等学校等の本科・別科、高等専門学校に進学した者（就職進学した者を含み、浪人は含まない）は男性で94.8%、女性で97.0%であり、男女計95.9%の割合であった。また、大学・短期大学への進学率は、過年度高等学校卒業生（浪人）を含み47.3%（全国）となっている。この様に後期中等教育機関や高等教育機関への進学が高まったことが高度経済成長の礎となり、経済発展などを支えてきた。また逆にそれらによって進学率が高まってきたともいえる。しかし昨今、学校における病理現象として、いじめや学級崩壊、またいわゆる「ムカツク」、「キレル」児童・生徒の問題などが

教育現場を困惑させ、その対応に関係者が苦慮している事実がある。くわえて地域社会の絆が薄れ、地域における住民共通の課題が解決されにくい状況にある。地域における社会教育施設が十分に活用されておらず、地域の特性を生かし、個々人のアイデンティティを尊重した開かれた教育機能が発揮しきれていない憾がある。このような現代教育における課題の解決に貢献することができると「生涯教育」という概念が注目されている。

生涯教育の理念とその考察が提案された社会的背景としては、急変する社会に対応できる能力を身につける必要性が生じたことや、さまざまな学習活動を通じて自己実現を図りたいという人々の欲求が高まったこと、受験競争の激化、学業不振児や非行問題の増加、学歴主義の進行などの様々な教育問題の解決策として、新しい教育理念の創出などが期待されていたことがあげられている。

生涯教育及び生涯学習とは現行の教育制度を再編成すること、及び教育制度の範囲外の教育におけるすべての可能性を発展させることを目的とし、社会的、経済的、宗教的などの理由によって教育の権利を保障されていなかった人々にも、教育の機会を保障することが生涯教育の実現につながるとしている。

このように生涯教育についての意義や重要性が認識され、様々な取り組みがおこなわれている。そして、社会変化によって問題の多い現代ではあるが、生涯を通じて学び続け、より善く生きる努力を惜しまない人々も増えつつあり、学習機会に対する需要も高まってきている。このような学習機会に対する学習者の意識の高まりは、多くの人々が生涯にわたって学習することの意義を認識しているといえ、我が国においても生涯学習社会への移行が進み、生涯学習の時代が到来しつつあるといえる。

ところが、学習の必要性を認識していることと、実際に学習の実践者であることとは必ずしも合致していない現状がある。つまり、学習機会への参加を希望している人の全てが学習を実践できているわけではないのである。言い換えれば、生涯学習機会に参加する学習者には、実際に学習活動を行うまでに様々な制約や問題が存在するといえる。学習機会に参加することを希望している学習者が、思い通りに学習機会に参加できないという問題点は、すなわち生涯学習社会を実現するにあたっての解決すべき課題である。

そこで本論文では、学習機会への参加を阻害する要因を明らかにすることによって、生涯学習機会に参加する学習者の現状を捉え、生涯学習機会における学習者の参加を支援するシステムの構築についての方策を検討することを主旨とする。

検討方法は、まず、先行研究から生涯教育および生涯学習機会に対する人々の意識について検討する。特に学習機会に参加する際に阻害要因となる事項について考察し、それら阻害要因と学習者の属性について見ていくことにする。

次に、実際に学習機会に参加している学習者がどのような点を阻害要因として受け取っているかを質問紙調査から明らかにし、学習者の属性と関連して検討して行くことにする。そして、

得られた結果から、学習者の属性に応じた学習機会への参加を支援する方策を導き出したいと思う。

## 第1章 わが国における生涯学習機会への学習者の参加状況

### 第1節 学習意欲と学習機会への参加状況の格差

生涯学習時代の到来といわれ、様々な学習機会が提供されつつある今日、生涯学習機会への参加が積極的に行われているように思える。しかし、学習関心を持つ人の割合に比べ、実際に学習を行った人の割合が低い。このことはどのような意味を示しているのだろうか。人々の自発的な学習活動の機会を保障しようとする生涯教育の理念に照らし合わせたときに、そこにある問題点が明確になるといえる。先行調査をみると、NHK放送文化研究所による学習関心調査<sup>(1)</sup>の結果では約9割の成人が生涯学習の必要性を認識している。しかし、実際に学習を行ったことがある人の割合を見てみると、第1回調査では40.2%であり、第2回調査では50.4%であり、第3回調査では45.0%にとどまっている。このことから、学習活動に関心を持っているからといって全ての人々が実際に学習活動を行っているわけではないことがわかる。また、過去1年間に何かを学んでみたいと思いながら学ぶことができなかった経験を尋ねたところ、第2回調査で31.1%、第3回調査で39.1%と全体の3～4割の者が有ると回答している。つまり、成人の場合では学習への希望や意欲はあっても現実には生活上の様々な制約から、それを行動に移せずにいる場合がある。また、実際に学習活動を始めても中断せざるを得ない状況も伺える。加えて、学習者の実態をその属性で見た場合、学習経験における格差が学歴別分析でよりいっそう顕著になることも指摘されているが、その傾向はNHK放送文化研究所の学習関心調査報告書からも伺える。このような学習参加状況の格差はアメリカにおける成人教育への参加状況からも、高学歴者ほど学習機会への参加率が高い状況が明らかになっている。そうした教育格差は職業機会や所得などにも反映され、所得の高い者ほど学習参加に積極的であれば、社会の不平等はとめどなく拡大再生産することになるといえる。このように、学歴が高い者ほど成人教育などの学習機会への参加率が高くなり、学歴が低い者との学習機会への参加状況に格差が生まれるという学習参加の状態をピーターソンはThe Education More Educationの法則と呼び警鐘を鳴らしている。<sup>(3)</sup>

### 第2節 学習機会参加の阻害要因

私達が目指している生涯学習社会とは、誰もがより善く生きるために、学びたいことを学ぶことができる社会であり、そのために様々な学習機会が整備されている社会であるといえる。そして人生の限られた期間である子どもから青年までの間に、知育を中心として行われる学校教育だけに留まらず、今日の大きく変化する社会に対応するために、人生を通して学ぶことが

できることが望ましいとされている。そのような学習機会への参加に必要となってくるのは、あくまで学習者自身の意思であり、その学習を行いたいという積極性によるものである。しかし、学習機会へ参加することを希望しながら、実際には叶わないでいる人々が少なからず存在するということは、生涯学習機会が万人に平等に保障されていないということになるのではないだろうか。また、生涯学習機会が平等に保障されていないとすれば、教育の格差を縮小するのではなく、むしろ格差の拡大を助長しているという批判も生まれる。

このようなことから、生涯学習機会における学習者の参加を支援するには、それらの不平等を是正することがなによりも急務となってくるといえる。まず、具体的に、どのようなことがらによって学習機会への参加を阻害されているのかを明らかにし、それら学習阻害要因に対応する方策を見出して行くことにする。では実際に、学習機会における学習者の参加を阻害する要因とはどのようなものがあるのだろうか。様々な先行研究の調査から、学習活動の主な阻害要因として、時間の問題、学習を行う機会やきっかけがない、費用がかかるといった理由が上位にあがっていることがわかる。このように成人の生涯学習参加における阻害要因を把握するために、ゴードン・G・ダーケンバルト<sup>(4)</sup>は阻害要因の類型化を試みている。彼によると成人の阻害要因を外的なものとの内的なものに分けたうえで、外的なものには「学習者の境遇に起因する障害」、「制度に起因する障害」、「情報に関する障害」が、また内面的なものには「心理的・社会的障害」があることを指摘している。次章では学習者が学習機会に参加するまでに解決しなければならない問題点に注目し、通信教育を受講している学生の学習阻害要因から考察していくことにする。

## 第2章 通信教育学生の学習阻害要因

### 第1節 質問紙調査の概要および一般学生とダブルスクール生の比較

第1章では生涯学習機会への学習者の参加状況、また学習機会への参加を阻害する要因について述べてきた。そのことから生涯学習機会に参加する学習者には様々な阻害要因がはたらき、やむなく学習参加を断念しなければならない場合や、一旦参加することができても中断せざるを得ない状況になることが少なからずあることが伺えた。では、現在の学習者にも同じような阻害要因が働いているのだろうか、また、学習者の属性と阻害要因にはどのような関係があるのだろうか。そして、実際に学習機会に参加している学習者は、どのようなことが阻害要因につながると考えているのだろうか。本章では通信教育学生を対象にしたアンケート調査からそれらについて考察を試みることにする。

#### 【調査の概要】

調査対象：佛教大学通信教育課程に在学する380名。調査時期：1998年8月下旬

調査方法：自記式質問紙（資料1）の集団記入法。分析方法：調査統計パッケージSPSSによっ

た。また、グラフは表計算ソフトExcelによった。

#### 【分析の目的】

実際に学習機会に参加している学習者が、どのようなことについて学習阻害要因になると考えているのかを明らかにする。そのことから、学習機会において学習者の参加を支援するためにはどのような取り組みが必要かを検討する。

#### 【分析の視点】

調査対象の属性によって、学習阻害要因に違いが見られるのではないかという考えから、調査対象の属性を調べ、それらの属性と学習阻害要因についての分析をおこなう。今回の調査対象の属性として特徴的であったのは、専門学校に通いながら通信教育を受講するダブルスクール生（以下、WS生と略記）が多く存在していたことである。そこで調査対象を大きくWS生群と一般学生群の2つに分けて分析を行うことにする。

#### 【調査対象の属性】

性別では、全体で男性が37.0%、女性が63.0%であり、女性が約6割を占めている。一般学生では男性が31.7%、女性が68.3%であり、WS生では男性が44.6%、女性が55.4%であった。全体の平均年齢は27.1歳（標準偏差＝10.2）であり、一般学生の平均年齢は32.3歳（標準偏差＝10.6）、WS生の平均年齢は19.9歳（標準偏差＝1.9）であった。全体的に中高年の学生では女性の占める割合が高くなることがわかる。また、WS生は89.8%が18歳から21歳までで占められていることから、高校を卒業してから直ぐに専門学校に入学した学生、もしくは、1～2年後に入学した学生であるとわかる。職業では、全体として社会人が33.7%、アルバイト・パートタイマーが13.3%、学生が42.2%となっている。このことから通信教育受講生は大きく、社会人やアルバイト・パートタイマーの仕事に従事している者と、学生つまりWS生の2群からなっていることがわかる。WS生の通う専門学校種としては、教育・社会福祉系専門学校が46.5%、次いで医療系専門学校が40.8%となっている。また、最終学歴では、全体で高校卒業が66.9%、専門学校卒業が23.0%であった。

また、質問紙のQ7において学習活動のキャリアについて尋ねている。一般学生では、様々な職業キャリアを積んでから通信教育を受講している傾向が見られた。また、仕事を始めてから数ヶ月～数年経ってから通信教育を受講している学生が多く見られた。その理由として、仕事を進める上で学習課題が発生したことや、経済的な余裕ができ学費が確保できるようになるなどが考えられる。また、女性では結婚や出産を契機に仕事を辞め、それから通信教育に参加するというケースが見られた。

#### 【受講目的・動機】

全体として回答の割合が高い動機・目的は「学歴を得るため」(19.9%)、「資格を取得するため」(18.2%)、「幅広い知識を身につけるため」(15.3%)、「専門知識・技能を習得するため」(10.7%)であった。また、一般学生では「資格を取得するため」と「学歴を得るため」が同じ

ウエイトを占めているのに対し、WS生では「学歴を得るため」が高い傾向がみられた。

動機・目的では「就職活動を有利にするため」という項目についてあてはまると回答している割合がWS生に高いことから、就職を前提に通信を受講しているといえる。言い換えれば、就職活動を有利にする学歴を得るための手段として通信を受講していると考えられる。他方、一般学生の受講動機・目的では、知識の獲得や生きがい・生活の励みのためという傾向が強いことから、学びたいという意味の表れと考えられる。学ぶという行為自体が目的として捉えられているのである。しかし、これには一般学生の57.7%が社会人であり改めて就職活動をする必要がないために、WS生よりも学習行為自体に価値を見出せることも考慮しなければならないといえる。

#### 【受講動機・目的の達成度】

通信受講の動機・目的の達成について、「達成されていると思う」と回答したものがWS生10.3%、一般学生33.5%であり、仮にこの設問を、日々の学習活動に対する積極性が反映されると考えれば、WS生より、一般学生の方に学習活動への積極性が表れているといえる。また、受講動機・目的から受け取れるように、動機・目的に学びたいという意思が反映されていることも、一般学生の方が動機や目的に対して達成感があることに関連するといえる。また、別の観点から考えれば、WS生は専門学校での授業に加えて通信講座を受講しているためその負担は大きい。そのため、学習活動が思うようにはかどらず達成感が低いとも考えられる。また、就職を有利にするための手段として通信受講を考えている学生にとっては、学習内容への関心が薄いこともあると考えられる。

#### 【学習阻害要因】

表1から、一般学生では「仕事がいそがしい」と、「学習をはじめするには年をとりすぎている」と感じていることが学習活動の阻害要因としてあげられている。このことは一般学生の57.7%が社会人であり、アルバイトやパートタイマーを加えると80.4%が何らかの職に従事していることになるため、仕事による時間的な制約などが学習活動の阻害要因としてあげられることがわかる。また、一般学生は30歳代23.6%、40歳代18.2%、50歳代5.0%、60歳代0.9%と全体の約半数が30歳以上であるため、WS生（全体の98.7%が24歳以下）などの比較的若い年齢層の学習者とのギャップを感じ、年齢が学習の阻害要因として感じていることがわかる。他方、WS生では「スクーリングの出席条件が厳しすぎる」「入学手続きがわかりにくい」「時間が足りない」といった制度や境遇に関する項目と、「過去の学習で成績不良だったので自分自身に自信がない」「学習を行うだけの根気がない」「学習することに喜びを感じない」「学習したいものや学習する理由がわからない」といった心理的な項目を阻害要因としてあげている。このことからWS生は、日常の専門学校における授業と大学通信講座による過度の時間的な束縛や、ダブルスクールを行うための複雑な履修登録手続きなどへの不満を感じていることが伺える。また、問5の中学校・高校時代の学習活動についての設問で、WS生の67.3%が「嫌いだった」も

表1. 学習阻害要因について（問4）

|                             |                | 全体   | 一般学生 | WS生  |
|-----------------------------|----------------|------|------|------|
| スクーリングの出席条件が厳しすぎる           | そう思う           | 20.6 | 14.2 | 29.5 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 23.5 | 19.7 | 28.8 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 25.9 | 31.7 | 17.9 |
|                             | そうは思わない        | 30.0 | 34.4 | 23.8 |
|                             | N              | 374  | 218  | 156  |
| 自分にあったコースがない                | そう思う           | 8.4  | 7.0  | 10.3 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 16.2 | 15.3 | 17.4 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 27.6 | 25.1 | 31.0 |
|                             | そうは思わない        | 47.8 | 52.6 | 41.3 |
|                             | N              | 370  | 215  | 155  |
| 入学手続きがわかりにくい                | そう思う           | 16.5 | 10.2 | 25.2 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 22.4 | 23.3 | 21.3 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 25.1 | 22.8 | 28.3 |
|                             | そうは思わない        | 36.0 | 43.7 | 25.2 |
|                             | N              | 370  | 215  | 155  |
| 時間が足りない                     | そう思う           | 47.8 | 42.6 | 55.1 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 31.5 | 33.8 | 28.2 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 13.7 | 14.8 | 12.2 |
|                             | そうは思わない        | 7.0  | 8.8  | 4.5  |
|                             | N              | 372  | 216  | 156  |
| 仕事がいそがしい                    | そう思う           | 31.6 | 38.7 | 21.2 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 24.3 | 31.6 | 13.7 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 15.4 | 16.5 | 13.7 |
|                             | そうは思わない        | 28.7 | 13.2 | 51.4 |
|                             | N              | 358  | 212  | 146  |
| 学習をはじめするには年をとりすぎている         | そう思う           | 4.8  | 6.9  | 1.9  |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 13.9 | 21.1 | 3.9  |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 15.3 | 19.3 | 9.7  |
|                             | そうは思わない        | 66.0 | 52.7 | 84.5 |
|                             | N              | 373  | 218  | 155  |
| 過去の学習で成績不良だったので<br>自分に自信がない | そう思う           | 13.2 | 7.8  | 20.6 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 21.8 | 20.7 | 23.2 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 25.5 | 30.0 | 19.4 |
|                             | そうは思わない        | 39.5 | 41.5 | 36.8 |
|                             | N              | 372  | 217  | 155  |
| 学習を行うだけの根気がない               | そう思う           | 11.8 | 6.5  | 19.4 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 32.0 | 31.8 | 32.3 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 25.5 | 26.7 | 23.9 |
|                             | そうは思わない        | 30.7 | 35.0 | 24.4 |
|                             | N              | 372  | 217  | 155  |
| 学習することに喜びを感じない              | そう思う           | 10.4 | 2.8  | 21.2 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 15.2 | 8.3  | 25.0 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 33.4 | 34.4 | 32.1 |
|                             | そうは思わない        | 41.0 | 54.5 | 21.7 |
|                             | N              | 374  | 218  | 156  |
| 学校や教室はなんだか縁遠い気がする           | そう思う           | 5.4  | 3.2  | 8.4  |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 11.5 | 8.7  | 15.5 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 27.3 | 26.1 | 29.0 |
|                             | そうは思わない        | 55.8 | 62.0 | 47.1 |
|                             | N              | 373  | 218  | 155  |
| 学習したいものや学習する<br>理由がわからない    | そう思う           | 5.9  | 2.3  | 11.0 |
|                             | どちらかといえばそう思う   | 9.7  | 3.2  | 18.7 |
|                             | どちらかといえばそう思わない | 26.1 | 26.9 | 25.2 |
|                             | そうは思わない        | 58.3 | 67.6 | 45.1 |
|                             | N              | 371  | 216  | 155  |

しくは「どちらかといえば嫌いな方だった」と回答していることから、過去の学習活動にたいするイメージが拭えず、心理的な面で学習への不安感を持っていることがわかる。

#### 【中学校・高校時代の学習活動】

中学校・高校時代の学習活動についての設問で「好きだった」と「どちらかといえば好きな方だった」に回答した者は、WS生で32.6%、一般学生で43.8%であり、「嫌いだった」と「どちらかといえば嫌いな方だった」に回答した者は、WS生で67.5%、一般学生で56.2%であった。また、「嫌いだった」・「どちらかといえば嫌いな方だった」と回答した具体的な理由としては、「苦手な科目や興味の持てない科目があったため勉強への意欲を失った」「勉強する意義を見出せなかった」「受験のための授業についていけなかった」「記憶力のみ評価されたように感じたので」「成績が良くなかったため自信を失った」「教師への嫌悪感や不信感から勉強が嫌になった」といったものが多くあげられていた。これらの理由について一般学生とWS生に大きな違いは見られなかった。この学習活動が嫌いになった理由は、大きく2つに分類できる。ひとつは、もともと学習活動が嫌いだったわけではないが、受験対策中心の授業内容についてゆけず成績の評価も低下し、学習活動自体が嫌いになる場合である。またもう一方は、勉強する意義を見出せないために学習活動が嫌いになるという場合である。前者の理由から考えられることは、学校教育が受験を最も大きく捉えているということである。個人の特性や興味・関心に適した進路であるか否かを問わず、さらに上の学校を目指すことが最も価値のあることのようにすべての学生を巻き込んで受験というものに教育現場が傾斜している状況があることを的確に示している。そのため進学するために必要な科目の成績が低いということは、必然的にその学生に対して疎外感を与えることになる。例え何かに特別な才能を持っていたとしても、それに対する評価よりも進学するために必要な科目の成績が低いということが大きく捉えられてしまうことになるのである。そのことは最終的に学生自身に自分はできない人間だという意識を与えることにもなりかねない。そのことが学習活動に対する漠然とした苦手意識を形成する原因のひとつだと考えられる。

また、後者の理由から考えられることは、現在の学校教育では自分が何をしたいのかが見えにくいということである。その原因は様々に考えられるだろうが、進学を前提にした受験対策中心の教育のあり方があげられるだろう。自己の特性や興味などに関係なく、とにかく進学することが当たり前のように考えられているなかでは、とにかく勉強し進学しなければならないと思わされてしまうといえる。そのような状況では、自分は何をすべきか、自分は何に興味があるのかなどということを考える余裕が持てない。そして最終的には、なぜ勉強するのかという根本的な疑問につながり、学習活動の意義が見出せなくなるのである。この設問に対する回答から、現在の教育の問題点が明確になっているが、それは同時に生涯学習機会の課題でもあるといえるだろう。

#### 【学歴による差別について】



日本社会の学歴による差別についてでは、「学歴による差別はあると思う」(WS生57.3%, 一般学生59.3%), 「どちらかといえば学歴による差別はあると思う」(WS生35.7%, 一般学生36.2%), 「どちらかといえば学歴による差別はないと思う」(WS生2.5%, 一般学生1.8%), 「学歴による差別はないと思う」(WS生0.6%, 一般学生0.9%), 「わからない」(WS生3.9%, 一般学生1.8%) という結果が得られた。このことからWS生と一般学生の間で学歴差別に対する感じ方にはほとんど差は無く, 全員がおしなべて今の日本社会では学歴による差別があると感じているのがわかる。

#### 【現在の生活への満足度】

現在の生活に対する満足度についてで, 「満足している」と回答した者が, WS生で8.9%, 一般学生で21.7%であった。問8の結果と関連して考えてみると, 自分自身に満足していない傾向があるWS生では, 現在の生活に対しても満足しているとはっきり肯定できず, 「まあ満足している」もしくは「やや不満である」と感じているのではないだろうか。つまり自分自身に満足している者ほど, 現在の生活にも満足することができ, 自分自身に対する劣等感が現在の生活に不満を感じさせている原因のひとつになっているといえる。

### 第2節 ダブルスクール生における学校適応群と学校不適応群の比較

前節では一般学生とWS生の比較をしたが, 今回調査を行ったところWS生の回答パターンにおいて分散が大きいことが認められた。そのため, WS生群には構造的に2群構造があるのではないかと仮定し, そこで, WS生に存在すると思われる2群を, 大きく学校適応群と学校不適応群の2つのコーホートに分類し, それらの相異点を明らかにしたい。

まず, 分析にあたって様々な変数を一元的に投入するために, 合成変数を作成した。投入したカテゴリーは, 調査質問紙の問2の通信教育受講の動機・目的の達成度についての設問, 問3の通信教育受講後の自分自身の変化についての設問におけるポジティブな傾向を示す9つの項目, 問13の現在の生活についての満足度である。

問2の通信教育受講の動機・目的の達成度についての設問で「達成されていると思う」にあてはまると回答した者は5点, 「どちらかといえば達成されていると思う」と回答した者は4点, 「どちらともいえない」と回答した者は3点, 「どちらかといえば達成されていないと思う」と回答した者は2点, 「達成されていないと思う」と回答した者は1点とした。

問3の通信教育受講後の自分自身の変化についての設問で, ポジティブな傾向を示す9つの項目についてあてはまると回答した者をそれぞれ1点, あてはまらないと回答した者をそれぞれ0点とした。

問13の現在の生活に対する満足度についての設問で, 「満足している」に5点, 「まあ満足している」に4点, 「どちらともいえない」に3点, 「やや不満だ」に2点, 「不満だ」に1点を与えている。そして, それらの合計点(最小値2点, 最大値19点)から, 得点の分布表を作成し,

得点の低い群を学校不適応群（N = 35）、得点の高い群を学校適応群（N = 50）とした。また、得点が中程度の45.8%（N = 72）はデータが相殺されて不明確になるため分析において棄却している。以下、WS生における学校適応群と学校不適応群について各設問項目について見ていくことにする。

【通信教育受講の動機・目的について】

表2から有意差がある項目を見ると、「幅広い知識を身につける」、「専門知識技能を習得する」、「交流の輪を広げるため」、「生き甲斐や生活の励み」、「地域での活動のため」についてあてはまると回答した者の割合が学校適応群に高くなっている。

これらのことから、通信教育受講の動機や目的が、自律的・積極的なものであるほどダブルスクールに対して積極的な態度を示し、学校に対しても適応しやすくなると考えられる。その反対に動機や目的が他律的・消極的なものほど、通信受講に対して意味や価値を見い出すことが難しく、学校に対しても不適応を起こすことが考えられる。

【通信教育受講後の自分自身の変化について】

表3から有意差がみられた項目についてみると、「自分の進路選択に疑問を感じるようになった」の項目においては学校不適応群の回答の割合が高くなっている。

現在の多くの専門学校は、経営戦略のためにダブルスクールを付加価値として位置づけている。そのため、専門学校生は強制的に通信教育を受講させられることになる。専門学校における授業と通信教育における授業の両方を受講することは学生にとって非常な負担となり生活時間にゆとりがなくなる。また、本来は専門学校で学ぶ内容にだけ興味を持っていた学生にとっ

表 2

|             | WS生   |        |      |      | 一般学生 | 有意水準 |
|-------------|-------|--------|------|------|------|------|
|             | 学校適応群 | 学校不適応群 | 有意水準 | 全体   |      |      |
| 通信受講の動機・目的  |       |        |      |      |      |      |
| 幅広い知識を身につける | 60.0  | 22.9   | **   | 38.2 | 59.3 | ***  |
| 専門知識技能を習得する | 46.0  | 14.3   | **   | 27.4 | 41.2 | **   |
| 人格形成のため     | 8.0   | 2.9    |      | 5.7  | 19.9 | ***  |
| 就職活動を有利にする  | 34.0  | 22.9   |      | 29.3 | 14.9 | **   |
| 周囲が勧めるから    | 2.0   | 8.6    |      | 7.0  | 3.2  | *    |
| 交流の輪を広げるため  | 22.0  | 5.7    | *    | 14.6 | 12.2 |      |
| 生き甲斐や生活の励み  | 12.0  | 0.0    | *    | 6.4  | 27.6 | ***  |
| 周囲が勉強しているから | 0.0   | 8.6    | *    | 1.9  | 0.5  |      |
| 離職・転職に備えるため | 2.0   | 2.9    |      | 1.9  | 10.0 | **   |
| 地域での活動のため   | 10.0  | 0.0    | *    | 3.8  | 8.1  | *    |
| 子育てや家族のために  | 2.0   | 0.0    |      | 0.6  | 3.6  | *    |
| キャリアアップのため  | 16.0  | 5.7    |      | 9.6  | 16.3 | *    |
| なんとなく       | 4.0   | 11.4   |      | 5.7  | 1.8  | *    |
| その他         | 8.0   | 22.9   | *    | 12.7 | 6.3  | *    |

p<.001\*\*\* p<.01\*\* p<.1\*

表 3

|                      | WS 生  |        |      |      | 一般学生 | 有意水準 |
|----------------------|-------|--------|------|------|------|------|
|                      | 学校適応群 | 学校不適応群 | 有意水準 | 全体   |      |      |
| 変化                   |       |        |      |      |      |      |
| 活発になった               | 24.0  | 0.0    | **   | 10.6 | 11.4 |      |
| 闘争心が強くなった            | 6.0   | 4.2    |      | 4.3  | 1.9  |      |
| 自分の人生に目的ができた         | 36.0  | 4.2    | **   | 22.7 | 44.1 | ***  |
| 自分の将来に自信が持てるようになった   | 14.0  | 4.2    |      | 5.7  | 12.3 | *    |
| 何事にも積極的になった          | 16.0  | 0.0    | *    | 7.1  | 14.2 | *    |
| 物事に打ち込めるようになった       | 20.0  | 0.0    | *    | 12.1 | 10.4 |      |
| 自分の進路選択に疑問を感じるようになった | 12.0  | 45.8   | **   | 23.4 | 18.0 |      |
| 勉強がおもしろくなった          | 26.0  | 4.2    | *    | 12.8 | 43.1 | ***  |
| 根気強くなった              | 24.0  | 0.0    | **   | 13.5 | 15.6 |      |
| 自分はできる人間だと思えるようになった  | 12.0  | 0.0    | *    | 6.4  | 7.1  |      |

p<.001\*\*\* p<.01\*\* p<.1\*

ては、通信教育で学ぶ内容は不本意なものとなり、進路選択に対しても疑問が生じるようになると考えられる。そのことが学校に対して不適応を起こす原因になるといえる。

通信教育の聴講や大学卒業という学歴を希望する専門学校生にとってダブルスクールとは非常に有効なものであるといえる。しかし、通信教育の受講を希望しない専門学校生にとってダブルスクールは様々な負担を強いる制度以外のなにものでもない。本来ダブルスクールは学生の学習希望に応えるためのものであったのが、専門学校の経営戦略の都合によって行われてきた傾向が伺える。つまり学生個人個人のニーズに応えるものではなく、専門学校のニーズに応えるものになっていたといえるだろう。そのため学生の希望や学習意欲は無視されてしまい、結果的に学校に対する不適応を起こす学生がでてきたのである。今日専門学校に求められるのは表層的なサービスの提供ではなく、学生のニーズに合致した授業内容の提供など教育機関としての根本的な部分の充実であるといえる。

#### 【学習阻害要因について】

表4から有意差がみられた項目についてみると、「卒業までにかかる時間が長すぎる」、「自分にあったコースがない」、「授業料などお金がかかりすぎる」、「仕事がいそがしい」、「過去の学習で成績不良だったので自分に自信がない」、「学習を行うだけの根気がない」、「学習することに喜びを感じない」、「学校や教室はなんだか縁遠い気がする」、「学習したいものや学習する理由がわからない」の全項目について学校不適応群の回答の割合が高くなっている。

これらのことから考えると学校不適応群は、通信教育の受講動機や目的が自律的なものより他律的なものの方が強いため「学習したいものや学習する理由がわからない」と感じているといえる。また、学習することの意義が見いだせないため、通信教育を受講することが「卒業までにかかる時間が長すぎる」、「自分にあったコースがない」、「学習することに喜びを感じない」といったことが苦痛に感じられていると考えられる。加えて「過去の学習で成績不良だっ

表 4

|                         | WS 生  |        |      |      | 一般学生 | 有意水準 |
|-------------------------|-------|--------|------|------|------|------|
|                         | 学校適応群 | 学校不適応群 | 有意水準 | 全体   |      |      |
| <b>学習阻害要因</b>           |       |        |      |      |      |      |
| （そう思う + どちらかといえばそう思う）   |       |        |      |      |      |      |
| 卒業までにかかる時間が長すぎる         | 32.0  | 55.9   | *    | 48.4 | 42.2 |      |
| スクーリングの出席条件が厳しすぎる       | 52.0  | 65.7   |      | 58.3 | 33.9 | ***  |
| 自分にあったコースがない            | 22.0  | 45.7   | *    | 27.7 | 22.3 |      |
| 入学手続きがわかりにくい            | 40.8  | 48.6   |      | 46.5 | 33.5 | *    |
| 昼間のスクーリングでは出席ができない      | 10.0  | 17.1   |      | 16.8 | 30.9 | **   |
| 授業料などお金がかかりすぎる          | 72.0  | 94.3   | *    | 80.1 | 73.9 |      |
| 時間が足りない                 | 81.6  | 85.7   |      | 83.9 | 76.3 | *    |
| 家事がいそがしい                | 22.7  | 24.2   |      | 25.7 | 35.3 | *    |
| 仕事がいそがしい                | 27.7  | 51.5   | *    | 34.9 | 69.8 | ***  |
| 育児がいそがしい                | 0.0   | 7.1    | *    | 2.3  | 19.3 | ***  |
| 学習をはじめるには年をとりすぎている      | 4.0   | 11.8   |      | 5.8  | 28.0 | ***  |
| 過去の学習で成績不良だったので自分に自信がない | 34.0  | 52.9   | *    | 43.9 | 28.6 | **   |
| 学習を行うだけの根気がない           | 38.0  | 70.6   | **   | 51.6 | 38.2 | *    |
| 学習することに喜びを感じない          | 28.0  | 74.3   | ***  | 46.2 | 11.0 | ***  |
| 学校や教室はなんだか縁遠い気がする       | 14.0  | 38.2   | *    | 23.9 | 12.0 | **   |
| 学習したいものや学習する理由がわからない    | 18.0  | 52.9   | **   | 29.7 | 5.6  | ***  |

p&lt;.001\*\*\* p&lt;.01\*\* p&lt;.1\*

たので自分に自信がない」、「学校や教室はなんだか縁遠い気がする」といった過去の経験から、学校や学習に対して消極的になっていることが伺える。そのため、学校適応群より通信教育を受講することでかかる経済的な負担が、より重いものとして感じられている。

#### 【自己意識などについて】

表5から「自分には他の人と同じ程度に能力がある」でどちらかといえばそう思わない、「自分自身に満足している」でそうは思わない、「自分のすることはいつでも正しいと思っている」でそうは思わないの項目でも学校不適応群の割合が高くなっている。これらのことから、学校不適応群は社会に対して不平等や理不尽さを感じ、自分自身のことについては不満を持ち、上手くことが進まないことに対していらだちを覚えている傾向があるといえる。

また、学校不適応群は「自分自身には他の人と同じ程度に価値がある」の項目でどちらかといえばそう思うと回答した割合が適応群よりも高いことがわかる。このことは「自分自身が他者と同程度に能力がある」ということと、「価値がある」ということでは異なるということを示しているといえる。つまり、WS生は自分の能力は他人と同程度にあると思ってはいないが、価値が劣るとは思っていない。それは、WS生は勉強ができることに価値を置かず、他の部分に重きをおいていることにつながっている。

以上のことから、WS生のなかにも学校適応群と学校不適応群の2群があり、それらの特徴には大きな差異があることが明らかになった。学校への適応と不適応を分ける要因としては、

表5

|                          | WS生   |        |      |      | 一般学生 | 有意水準 |
|--------------------------|-------|--------|------|------|------|------|
|                          | 学校適応群 | 学校不適応群 | 有意水準 | 全体   |      |      |
| 自分には他の人と同じ程度に価値がある       |       |        |      |      |      |      |
| そう思う                     | 24.5  | 20.0   |      | 26.6 | 37.9 | **   |
| どちらかといえばそう思う             | 32.7  | 42.9   |      | 37.7 | 43.5 |      |
| どちらかといえばそう思わない           | 28.6  | 25.7   |      | 25.3 | 12.1 |      |
| そうは思わない                  | 14.3  | 11.4   |      | 10.4 | 6.5  |      |
| 自分には他の人と同じ程度に能力がある       |       |        |      |      |      |      |
| そう思う                     | 18.0  | 14.3   |      | 18.1 | 24.9 | ***  |
| どちらかといえばそう思う             | 34.0  | 22.9   |      | 30.3 | 45.1 |      |
| どちらかといえばそう思わない           | 24.0  | 42.9   |      | 33.5 | 23.0 |      |
| そうは思わない                  | 24.0  | 20.0   |      | 18.1 | 7.0  |      |
| 自分自身に満足している              |       |        |      |      |      |      |
| そう思う                     | 18.4  | 14.3   | *    | 15.6 | 17.5 | ***  |
| どちらかといえばそう思う             | 30.6  | 8.6    |      | 24.7 | 40.6 |      |
| どちらかといえばそう思わない           | 28.6  | 42.9   |      | 31.8 | 29.0 |      |
| そうは思わない                  | 22.4  | 34.3   |      | 27.9 | 12.9 |      |
| 自分のすることはいつでも正しいと思っている    |       |        |      |      |      |      |
| そう思う                     | 8.2   | 11.4   |      | 9.7  | 3.7  | *    |
| どちらかといえばそう思う             | 24.5  | 14.3   |      | 21.3 | 30.1 |      |
| どちらかといえばそう思わない           | 32.7  | 22.9   |      | 35.5 | 36.1 |      |
| そうは思わない                  | 34.7  | 51.4   |      | 33.5 | 30.1 |      |
| 就職する際の資格の効用について          |       |        |      |      |      |      |
| より多く持っている方が評価されると思う      | 40.0  | 37.1   |      | 38.2 | 27.6 | *    |
| 必要な資格がいくつかあればよいと思う       | 52.0  | 54.3   |      | 54.8 | 62.9 |      |
| 持っているに越したことはないがなくても問題はない | 4.0   | 8.6    |      | 5.1  | 9.0  |      |
| 資格は取り立てて必要ないと思う          | 0.0   | 0.0    |      | 0.6  | 0.0  |      |
| わからない                    | 4.0   | 0.0    |      | 1.3  | 0.5  |      |

p<.001\*\*\* p<.01\*\* p<.1\*

まず、学習活動の動機・目的が明確か否か、また、その動機・目的が自律的か他律的なのかということがあげられる。そのことが学習活動に参加する姿勢を積極的なものにするか消極的なものにするか決定するといえ、結果的に学習活動の動機・目的の達成度に反映されている。

加えて、過去の学習活動に対する印象も、学習をすることに対して喜びを感じるか否かにつながることから、学校適応・不適応を分ける要因のひとつとして考えられる。

また、社会における不平等に対する感じ方や、自分自身についての価値観も大きな影響を与えている。社会の不平等に対する不満が高く、自分自身に満足できずにいる傾向が強いほど学校に対して不適応をおこしている。また、他者と同程度に価値があることを強く感じており、努力とは無関係の偶然的で運命的な幸福といえる運の要素に対して期待する部分が大きい場合も学校に対する不適応を示すといえ、自分に運がめぐってこないことへの苛立ちから起因していると考えられる。

第3節 学校に対する適応を規定する要因について

では、次に学校に対する適応はどのような要因に強く規定されているのかを検討してみたい。学校に対する適応を規定する要因の影響力を明らかにし、WS生に特有の傾向をもつといえるのか、または一般学生にもいえる傾向なのかについて考察してみたいと思う。

【重回帰分析について】

ここでは、複数の独立変数によって一つの従属変数を説明しようとする場合の分析方法として使用できる重回帰分析によって考察することにする。

そこで各質問項目から得られた結果から、有意水準が高いものを独立変数とし、学校への適応を従属変数と考え重回帰分析を行った。

その結果から、一般学生（表6）については、「自分自身には他の人と同じ程度に能力がある」とは思わないが、「自分自身には他の人と同じ程度に価値がある」と感じており、「学習したいものや学習する理由」が明確であり、「学習をはじめするには年をとりすぎている」とは思わず、

表6. 重回帰分析（一般学生）

| 標準化係数 有意水準                      |     |         |       |
|---------------------------------|-----|---------|-------|
|                                 | N   | $\beta$ |       |
| 1 自分には他の人と同じ程度に能力がある（そうは思わない）   | 213 | 0.321   | 0.002 |
| 2 自分には他の人と同じ程度に価値がある（そう思う）      | 214 | -0.309  | 0.004 |
| 3 学習したいものや学習する理由がわからない（そうは思わない） | 216 | 0.142   | 0.141 |
| 4 学習をはじめするには年をとりすぎている（そうは思わない）  | 218 | 0.138   | 0.125 |
| 5 周囲が勉強しているから（あてはまる）            | 221 | 0.132   | 0.147 |
| 6 学校や教室はなんだか縁遠い気がする（そうは思わない）    | 217 | 0.126   | 0.212 |
| 6 自分にあったコースがない（そうは思わない）         | 215 | 0.126   | 0.132 |
| 8 育児がいそがしい（そう思う）                | 187 | -0.121  | 0.255 |
| 9 学習を行うだけの根気がない（そう思う）           | 217 | -0.109  | 0.252 |
| 10 専門知識・技能を習得するため（あてはまらない）      | 221 | -0.090  | 0.301 |

$R^2 = .208$

表7. 重回帰分析（WS生）

| 標準化係数 有意水準                      |     |         |       |
|---------------------------------|-----|---------|-------|
|                                 | N   | $\beta$ |       |
| 1 専門知識・技能を習得するため（あてはまる）         | 157 | 0.222   | 0.031 |
| 2 生き甲斐や生活の励みのため（あてはまる）          | 157 | 0.191   | 0.052 |
| 3 学習したいものや学習する理由がわからない（そうは思わない） | 155 | 0.189   | 0.056 |
| 3 卒業までにかかる時間が長すぎる（そうは思わない）      | 155 | 0.189   | 0.045 |
| 5 周囲が勉強しているから（あてはまらない）          | 157 | -0.145  | 0.090 |
| 5 交流の輪を広げるため（あてはまる）             | 157 | 0.145   | 0.153 |
| 7 授業料などお金がかかりすぎる（そうは思わない）       | 156 | 0.143   | 0.147 |
| 8 就職活動を有利にするため（あてはまる）           | 157 | 0.121   | 0.167 |
| 9 スクーリングの出席条件が厳しすぎる（そう思う）       | 156 | -0.119  | 0.221 |
| 10 幅広い知識を身につけるため（あてはまる）         | 157 | 0.103   | 0.323 |

$R^2 = .440$

「周囲が勉強している」ことを考慮にいれているほど、学校への適応が高いことが明らかになった。

また、WS生（表7）については、学習の動機・目的が「専門知識・技能を習得するため」、  
「生き甲斐や生活の励みであるため」であり、「学習したいものや学習する理由」が明確であり、  
「周囲が勉強している」ことに無関係にとりくむほど、学校へ適応することがわかった。

これらのことから、WS生は学習の動機・目的が明確であること、つまり、学習する理由がはっきりとしていることが学校への適応度を高めているといえる。また、周囲がどのようであれ自分自身が学びたいという動機をもっていることが大切になる。

一方、一般学生では自分の能力はそれほど高いとは思っていないが、学習する価値は十分にあるという自己への評価と、学習したい内容が明確であることに加えて年齢を気にしない積極性があることが学校への適応度を高めているといえる。

### 第3章 まとめ

第2章の調査結果をまとめると、専門学校生、一般学生を問わず、現在の日本社会が学歴を重視する風潮があると認識しているといえる。そのため通信教育などの学習機会への多くの人々が参加している。そのなかには、専門学校に通いながら通信教育も受講するというWS生も多く存在する。ところが、WS生の消極的な学習参加態度が目立つなどの指摘がされ、その対応が課題となっている。そこで問題となるのが、これまでの視点が「一般学生」、「WS生」といった大きな枠組みからだけではの捉え方であり、学習者をより細かく捉えるという認識が弱かった点である。今回の調査でも、WS生群において学校適応群と学校不適応群の2群が存在することが明らかになったが、今までのように学習者をひとまとめにした捉え方では、正確に学習者のニーズを捕らえることが難しい。これからの生涯学習機会において重要な視点とは、学習者個人々にまで注目することであるといえる。

生涯学習機会に参加する学習者が増加している今日において、学習者のニーズに合った学習機会を提供することが重要になっている。しかし、現状では学習機会に参加したいと考えていても様々な要因から、実際に参加することができない潜在的な学習者が多い。そのため、学習阻害要因を明らかにし、それらを取り除く努力がより一層必要となる。今後、個性化や価値観の多様化が進むなかで、学習機会に参加する人々も様々な学習要求や学習意欲を持つだろう。そのような学習者に対応していくためには、学習者を個人個人として捉えていくという視点が重要になってくる。そのため今後は学習者を大きな視点で捉える一方で、ひとりひとりの学習者のニーズなどを把握しできる限り対応するという2つ方向からのアプローチが必要である。

個人の能力に応じた学習機会の提供を実現するには、18歳人口が減少し様々な教育機関が構造の転換期を迎えている現在が絶好の機会といえる。その時の重要な視点として、各個人の能力における差異をどのように捉えるかがあげられる。今までの学校教育という学習機会におい

ては、ある分野についての能力が非常に優れていたとしても、知育という点で劣っている場合は評価されにくかった。今回の調査で、中学校・高校時代の学習活動について好きであったか、嫌いであったかを問い、嫌いであった者にはその理由を具体的に記述してもらった。その理由として、「できる人対象の授業だったのでついてゆけず面白くなかった」、「苦手な科目や興味の持てない科目があったため勉強への意欲を失った」、「受験のための授業についていけなかった」、「記憶力のみ評価されたように感じたので」、「成績が良くなかったため自信を失った」といったものがあげられていたが、このことは今までの学校教育では、ある個人に対する評価が一側面でしか行われていないことを表している。例え何かに対して優れた能力を持っていたとしても、評価されなかったのである。しかし、学校教育が知育を基本に置いていることから、他の面での評価には限界があるといえる。そのようなことから評価が多面的におこなえる生涯教育からのアプローチが大切になってくる。そのためには、私達の意識を変革していくことも必要だといえる。今までのように、知識の多寡やいわゆる学校教育での成績を基準とした人物評価だけではなく、多くの側面から人物を評価することができるということを意識していくことから始めるのである。また、人間形成に大きな影響を与える学校教育段階において、他者に対する多面的な評価の仕方を身につけられるような教育も重要になる。また、もうひとつの重要な視点として、個々人の異なる能力を相互補完的に人間関係の中で生かし合うということである。自己の能力を認めてもらうことにより、人間は自分自身に対する価値観を形成することができるのであり、どんなに有能な人物であっても周りにその能力を認め、信じている人々がいないればその能力を発揮することはできない。お互いに相手の能力を認め合うことができれば、学習活動に対する疎外感を感じることもなく自分自身に対する評価も高くなるといえる。今後は他者に対する評価基準を相互関係の中で模索できるような学習機会を求めていく必要がある。それらの努力が、生涯学習機会における学習者の参加を支援することにつながるといえる。

#### 注

- (1) NHK放送文化研究所編『NHK学習関心調査（'82, '85, '88）報告書 日本人の学習－成人の学習ニーズをさぐる－』第一法規出版, 1990
- (2) 香川正弘編著『生涯学習概論－生き生きとした学習主体の形成－』東洋館出版社, 1992, 小池源吾, 第3章生涯学習の機会, p36～37。その他、教育と社会階層・階級との相互関連について多く先行研究で分析がされている。また、ブルデューらの文化資本という概念・理論枠組みからの研究（秋山えみ「成人の学習・文化活動における不平等構造」生涯学習・社会教育学研究第22号, 1997）もされている。
- (3) Richard E. Peterson & Associates, 『Lifelong Learning in America』JOSSEY-BASS, 1979, p424
- (4) 清水一彦他著『教育データランド'98-'99』時事通信社, 1998, p207
- (5) Gordon G. Darkenwald and Sharam B. Merriam, Adult Education: Foundations of Practice (N.Y.: Harper, 1982, p136-141)



資料1：質問紙（資料用に再構成、一部割愛）

問1. あなたが佛教大学の通信を受講しようと思った動機・目的は何ですか。次のなかからあてはまるものをいくつでも選び、その番号に○をつけてください。

- |                  |                     |                  |                   |
|------------------|---------------------|------------------|-------------------|
| 1. 資格を取得するため     | 2. 学歴を得るため          | 3. 幅広い知識を身につけるため | 4. 専門知識・技能を習得するため |
| 5. 人格形成のため       | 6. 就職活動を有利にするため     | 7. 周囲が勧めるから      | 8. 交流の輪を広げるため     |
| 9. 生きがいや生活の励みのため | 10. 周囲が勉強しているから     | 11. 世の中や人のために    | 12. 離職・転職に備えるため   |
| 13. 地域での活動のために   | 14. 子育てや家族のために      | 15. キャリアアップのため   | 16. 親の仕事を継ぐため     |
| 17. なんとなく        | 18. その他（具体的に：_____） |                  |                   |

問2. あなたが佛教大学の通信を受講しようと思った動機・目的は達成されていますか（または達成されそうですか）。次のなかからあてはまる番号にひとつだけ○をつけてください。

- |                        |                       |              |
|------------------------|-----------------------|--------------|
| 1. 達成されていると思う          | 2. どちらかといえば達成されていると思う | 3. どちらともいえない |
| 4. どちらかといえば達成されていないと思う | 5. 達成されていないと思う        |              |

問3. 佛教大学の通信を受講してからのあなたご自身の変化についてお伺いします。次のなかからあてはまるものをいくつでも選び、その番号に○をつけてください。

- |                         |                         |                      |
|-------------------------|-------------------------|----------------------|
| 1. 活発になった               | 2. 闘争心が強くなった            | 3. 自分の人生に目的ができた      |
| 4. 自分の将来に自信が持てるようになった   | 5. 何事にも積極的になった          | 6. 物事に打ち込めるようになった    |
| 7. 仲間や友人をつくりやすくなった      | 8. 自分の進路選択に疑問を感じるようになった | 9. 勉強がおもしろくなった       |
| 10. 教師に対して親しみが持てるようになった | 11. 資格は必要だと再認識した        | 12. 学歴に対する思い入れが強くなった |
| 13. 根気強くなった             | 14. 自分ができる人間だと思えるようになった |                      |

問4. 学習上の悩みについてお伺いします。次にあげる各項目ごとに、4つの尺度のうちからあてはまるものをひとつ選び、その数字に○をつけてください。

1. 制度に関する悩み

- |                       | そう思う | どちらかといえば<br>そう思う | どちらかといえば<br>そう思わない | そうは思わない |
|-----------------------|------|------------------|--------------------|---------|
| 1) 卒業までにかかる時間が長すぎる    | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 2) スクーリングの出席条件が厳しすぎる  | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 3) 自分に合ったコースがない       | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 4) 入学手続きがわかりにくい       | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 5) 昼間のスクーリングでは出席ができない | 1    | 2                | 3                  | 4       |

2. 境遇に関する悩み

- |                   | そう思う | どちらかといえば<br>そう思う | どちらかといえば<br>そう思わない | そうは思わない |
|-------------------|------|------------------|--------------------|---------|
| 1) 授業料などお金がかかりすぎる | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 2) 時間が足りない        | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 3) 家事がいそがしい       | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 4) 仕事がいそがしい       | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 5) 育児がいそがしい       | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 6) 交通の便が悪い        | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 7) 勉強をする場所がない     | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 8) 友人や家族の理解が得られない | 1    | 2                | 3                  | 4       |

3. 情報に関する悩み

- |                           | そう思う | どちらかといえば<br>そう思う | どちらかといえば<br>そう思わない | そうは思わない |
|---------------------------|------|------------------|--------------------|---------|
| 1) 学習可能な場所などに関する情報が不足している | 1    | 2                | 3                  | 4       |

4. 心理的な悩み

- |                            | そう思う | どちらかといえば<br>そう思う | どちらかといえば<br>そう思わない | そうは思わない |
|----------------------------|------|------------------|--------------------|---------|
| 1) 学習をはじめるには年をとりすぎている      | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 2) 過去の学習で成績不良だったので自分に自信がない | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 3) 学習を行うだけの根気がない           | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 4) 学習することに喜びを感じない          | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 5) 学校や教室はなんだか縁遠い気がする       | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 6) 学習したいものや学習する理由がわからない    | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 7) 他人から野心家と思われたくない         | 1    | 2                | 3                  | 4       |

問5. 中学校・高校時代の学習活動についてお伺いします。

- ①勉強は好きでしたか。 1. 好きだった 2. どちらかといえば好きな方だった 3. どちらかといえば嫌いな方だった 4. 嫌いだった  
 ②上記で、3.、どちらかといえば嫌いな方だったまたは4. 嫌いだったと答えた方は、その理由はどのようなことにあったと思いますか。下の欄に具体的に記入して下さい。

生涯学習機会における学習者の参加を支援するシステムの構築についての方策（高橋 一夫）

問 8. あなたは、次に示す考え方についてどう思いますか。各項目ごとに、4つの尺度のうちからあてはまるものをひとつ選び、その数字に○をつけてください。

|                           | そう思う | どちらかといえば<br>そう思う | どちらかといえば<br>そう思わない | そうは思わない |
|---------------------------|------|------------------|--------------------|---------|
| 1. 国民の意識は世論として政治に反映できる    | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 2. われわれが少々努力しても政治はよくなる    | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 3. 今後、日本社会では貧富の差が大きくなっていく | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 4. 成功は努力より運の要素の方が強いと思う    | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 5. 自分には他の人と同じ程度に価値がある     | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 6. 自分には他の人と同じ程度に能力がある     | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 7. 自分自身に満足している            | 1    | 2                | 3                  | 4       |
| 8. 自分のすることはいつでも正しいと思っている  | 1    | 2                | 3                  | 4       |

問 9. 一般的にいって、いまの日本の社会には学歴による差別があると思いますか。次のなかからご自身の考えに一番近いものをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

1. 学歴による差別はあると思う      2. どちらかといえば学歴による差別はあると思う      3. どちらかといえば学歴による差別はないと思う  
4. 学歴による差別はないと思う      5. わからない

問 13. あなたは、全体として、現在の生活にどの程度満足していますか。次のうちからあてはまるものをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

1. 満足している      2. まあ満足している      3. やや不満だ      4. 不満だ      5. どちらともいえない

ここからは、あなたご自身についてお尋ねします。

Q 1. あなたの年齢はおいくつですか。下の（ ）に記入して下さい。

（                      ） 歳

Q 2. あなたの性別はどちらですか。あてはまる方に○をつけてください。

1. 男                      2. 女

Q 3. あなたのご職業は何ですか。次のなかからあてはまるものに○をつけてください。

1. 社会人                      2. アルバイト・パートタイマー                      3. 主婦                      4. 学生  
5. 無職                      6. その他（                      ）

Q 4. ①Q 3で1. 社会人と答えた方に質問します。ご職業は何ですか、下の（ ）にご記入下さい。

職業名（                      ）

Q 5. ①Q 3で4. 学生と答えた方に質問します。どのような学校に通っておられますか。次のなかからあてはまるものに○をつけてください。

1. 専門学校 → ※下の枠のいずれかにも○をつけてください。

工業系・農業系・医療系・衛生系・教育社会福祉系・商業実務系・家政系・文化教養系

2. 短期大学

3. 4年制大学

4. その他（                      ）

②もしよろしければ、現在通っておられる学校の名称を教えてください

学校名（                      ）

Q 6. あなたが最後に行かれた学校はどちらですか。次のなかからあてはまるものに○をつけてください。また、中退か卒業のどちらかにも○をつけてください。

1. 高校（中退・卒業）      2. 専門学校（中退・卒業）      3. 短期大学（中退・卒業）      4. 4年制大学（中退・卒業）  
5. その他（                      ）

Q 7. あなたの学習活動のキャリアについて、下の欄にできるだけ具体的に記入下さい。

例：高校卒業→コンピューター関連企業に勤務（1年間）→短期大学→システムエンジニアとして社会福祉関係の  
仕事をする（4年目）+現在、佛教大学通信教育受講中。

（たかはし かずお      教育学研究科生涯教育専攻修士課程修了）

1999年10月15日受理